### 『論語逢原』 雍也篇 「伯牛有疾」 章における伯牛の病臥位置について

#### 杉 Щ 也

### はじめに

う話である。 見舞った際に、 る。 『論語』 孔子の弟子である冉耕(字は伯牛)が重い病気にかかり、孔子がそれを 雍也篇 直接会わずに窓から手を執って伯牛の病気を悲しんだ、とい 「伯牛有疾」章に、 「牖自り其の手を執る」という句があ

報告をしたことがある (注1)。 それは、以下のような問題であった かつてこの箇所の用字問題で、中井履軒『論語逢原』の 「牖」字について

いる。 されているが、ここでは省略する。) 牖 『日本名家四書注釈全書』所収中井履軒『論語逢原』の該当箇所において、 字の誤植があった。 (見やすくするため、 『論語逢原』の該当箇所は、 当該字に傍点を付した。原文は返り点などが付 以下のようになって

○伯牛有疾。子問之。 自慵執其手。曰。亡之。命矣夫。斯人也。 而有斯

### 疾也。 斯人也。 而有斯疾也

包咸日。 牛有惡疾。不欲見人。故孔子從牗執其手也

惡疾者。皆不欲近于人。於所尊敬尤避慝。 蓋自慚其醜惡臭穢。 而恐

爲其所惡也。

病者居北牖下。君視之。 遷南牖下。 見于儀禮註疏 論語註疏引之。 誤

作南牖。 集註沿之。

目。 古人堂室之間。隔以牖。 不當妄改舊文耳。或者遂云。南有牗無牗非也 牖戸之間。 謂之扆。 顧命曰。 而戸在東。又鑿牖爲牗于西。 牖間敷重席。 。 然則南牗亦非無牗。 以通明。 故爾雅 但

北牖· 者。 室中牖下。 即是奧矣。爲主人之常處。 病臥宜亦在于此。 何必北牖。 居

蓋禮疏之杜撰。

不可從。

(注2)

する。)では、以下のようになっている。 治四十四年、 しかし、 『日本名家四書注釈全書』が底本としている、 松村文海堂。 明治四十五年、 東陽堂。 (識別しやすくするため、当該字 以 下 「文海堂本」と略称 『論語逢原』 (明

にそれぞれ傍点を付した。 原文の返り点は省略する。

疾 ○伯牛有疾。子問之。 也。 斯人也。 而有斯疾也。 自牖執其手。 듼。 亡之。 命矣夫。 斯人也。 而 有斯

包咸日、 牛有惡疾、 不欲見人、 故孔子從牖執其手也

惡疾者、 皆不欲近于人、 於所尊敬尤避慝、 蓋自慚其醜惡臭穢 而恐

爲其所惡也

作南牖、 病者居北牖下、 集註沿之、 君視之、 遷南墉下、 見于儀禮註疏、 論語註疏引之、 誤

不當妄改舊文耳、 古人堂室之間、 牖戸之間、 隔以墉、 謂之扆、 或者遂云、 顧命曰、 而戸在 南有墉無牖、 東、 牖間敷重席、 又鑿墉爲牖于西、 非也、 然則南墉亦非無牖、 以 通明、 故爾雅 但

北牖者、 室中牖下、 蓋禮疏之杜撰、 即是奥矣、 爲主人之常處 不可從、 (注3) 病臥宜亦在于此 何必北 牖 居

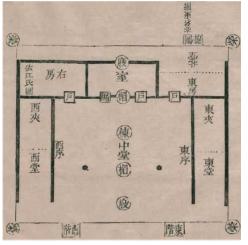
ではすべて は「まど」の意であり、 い分けており、 墉▲ 目 .本名家四書注釈全書』本の誤植である。それぞれの字義については、「牖 題 ともに通じる異体字である。 は、 牗◑ またそれらの用字は中井履軒自筆本も同様である。 字であるが、 牖△ 「墉」 は 墉▲ 底本の文海堂本では の三字である。 「かべ、へい」の意である。 『日本名家四書注釈全書』 「 牖△ 塘▲ 慵∙ の二字を使 つまりは は 牖△ 本

使い分けについて要約すると、 用字 植 の使い  $\mathcal{O}$ 問題は以上のとおりである。 分けがどのような意味になるのかについて論じた。この文字の 以下のようである 前稿においては、 中井履軒のそれぞれ

> などが 南には を付さない。 室の北には、 北牖 「墉(かべ)」 (まど) 墉▲ (かべ) \_ があり、 の下に居る」というのは間違いである。 はあるが そこに「牖 牖\_ (まど) 」 (まど)」はない。 が作られて (以後は傍点 方、 る。 注疏 室  $\mathcal{O}$

軒がどのように解釈していたかという問題である。 問題について検討したい。 たのは室中のどの位置か、そしてそれはなぜかということについて、 さて本稿においては、 すなわち、 牖 墉 孔子が見舞った際の伯牛が病臥して 字の解釈に限定せず、 それに関連した 、中井履

図 まず、 では、 室の状況について説明する。 次のようになっている。 (注3) 張恵言『儀礼図』巻上の 「大夫士房室



張恵言『儀礼図』巻一「大夫士房室図」(部分) (国立国会図書館蔵)

西寄りに 中央の 堂 牖 (まど)」 の 北 に がある。 室 がある。 孔子が伯牛の手を執ったのは 室 0 南壁の東寄り Œ 三 この があり、 牖 **(ま** 

ど)」越しだと考えられる。

次に、 伯牛のいた位置についての諸説を見てみる。

ない。しかし、 子は窓越しに伯牛の手を執った。このことについては、 孔子が見舞いに来たが、伯牛は病気のために面会をためらった。そこで孔 孔子が見舞った際の伯牛の病臥位置については、いくつかの 諸注釈の間で異論は

### 病臥位置に言及しない注釈

説がある。

注疏』 以下のように言うのみで、孔子と伯牛との位置関係については言及しない。 まず、 0 解釈は以下のとおりである。何晏の集解は、 その病臥位置に言及しない注釈として『論語注疏』がある。 包咸の説を引き、 『論語 ただ

牛惡疾有れば、 人を見るを欲せず。故に孔子牖從り其の手を執るなり。

(注5)

衍するのみである。 いることは明らかである。またそれに対する邢昺の疏でも、 孔子が牖越しに伯牛の手を執ったことから、伯牛が室内に、孔子が室外に 以下のように敷

の手を執るなり。 伯牛惡疾あれば、 人を見るを欲せず。故に孔子之を問ふとき、牖從り其

(注6)

邢昺の疏は 「孔子が伯牛を見舞った時に」という句を付け加えているだけ

> で、 牖越しに手を執ったのだから、 れを明文化していないだけであるとも言える 両者の空間的位置関係についてのさらなる言及はない。ただし、 その時伯牛は室の南側にいたはずであり、 孔子は

# 病臥位置を室の北側から南側に移動させたとする注釈

を紹介する。すなわち、 で南側に移動した」とする説である。 次に、 伯牛の病臥位置に言及している注釈のうち、 「室の北側に病臥していたのだが、 次の皇侃の説がそうである。 通説だと考えられる説 孔子が見舞った

皇侃『論語義疏』の解釈は、 以下のとおりである。

り、 る、 せざるを恐れ、 牖 南面することを得しむるなり。孔子其の惡疾あれば人を見るを欲 故に南窓の下に遷出して、亦た東首す。 は南窓なり。君子疾有らば、 故に戸に入らず、但だ窓上に於て其の手を執るなり。 北壁の下に寐ねて東首す。 師をして戸從り床北に入 今 師 來

(注7)

である。 て、 くないだろうと心配して室に入らず、南窓の窓越しに手を執った、というの に向けたとする。そうすることで、孔子は伯牛が臥している牀の北側に立 に病臥していたところ、孔子が見舞いに来たので南窓の下に移動し、 ここでは室内における位置関係について述べられている。伯牛は北壁の下 南面することができる。しかし孔子は伯牛がその悪疾のため人に会いた 頭を東

ここでまず問題になるのは、なぜ伯牛は室の北側に病臥していたかという

ことである。

そして、その鄭玄の注は以下のようにいう。二二に「〔病。疾なるときは〕寢ぬるに、北牖の下に東首す。」とある(注8)。病人が室の北側で病臥することについては、たとえば、『礼記』喪大記第

病者は恒に其の墉下に居る、或いは「北墉の下」と爲す。 (注9)

通常、室の北墉の下に臥すということになる。るが、引用した鄭注どおりの「墉(かべ)」字のままで解釈すれば、病人は前稿ではまさにこの「墉」字と「牖」字との問題について報告したのであ

ろうか。 では、この『礼記』喪大記の鄭注に対する孔穎達の疏はどうなっているだ

之を視るを得しむるなり。(注10) であるな得しむるなり。(注10) であるというでは、則ち暫時南埔の下に移嚮して東首し、君をして南面して所なり。今謂へらく、病者恒なるときは北牖の下に在るなり。若し君視ざる東首す」と云ふ。是れ恒なるときは北牖の下に在るなり。若し君視ざる「病者は恒に北牖の下に居る」と云ふは、『士喪』下篇に「北牖の下に

〔どちらの方角に頭を向けるかについて〕それは病人の都合による(熊安生いる。そして、君主が見舞いに来た時でない限り東を頭にするとは限らず、次のように解釈する。すなわち、病人は普段は北牖の下に臥すことになってここで孔疏は『儀礼』「士喪礼」下篇(すなわち「既夕礼」)を引用して、

の原文では「北埔」となっている。 藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』(いわゆる阮元本)『儀礼』既夕礼り、孔疏が引用している『儀礼』経文も「北牖」、南は「埔」と使い分けておうに解釈している。ここで孔疏は、北は「牖」、南は「埔」と使い分けておい、君主が病人に対して南面できるようにするのである。孔疏は以上のよの説)。しかし、君主が見舞いに来た時は、暫時南埔の下に移動して東を頭の説)。しかし、君主が見舞いに来た時は、暫時南埔の下に移動して東を頭

る。この場合は、孔子自身が病気になった時の話である。ところで、この室内の病臥位置問題に関連した章が、『論語』郷党篇にあくの注釈において同様に説かれており、通説となっている。ところで、この「君主が見舞いに来た時には、室の南に移動する」という説は、なお、この「君主が見舞いに来た時には、室の南に移動する」という説は、

疾ありて、君之を視るとき、東首し、朝服を加へ、紳を拖く。(注11)

この包咸注に、以下のようにある。

を拖く。 (注12)包日く、夫子疾あれば、南牖の下に處り、東首し、其の朝服を加へ、紳

そして邢昺の疏では、次のようにいう。

遷鄕し、東首す。君をして南面して之を視るを得しむるなり。 (注13)病者は常に北牖の下に居るも、爲し君 來視せば、則ち暫時南牖の下に

と同様である。 南側に移動して、君主を南面させるとしている。その点では前述の皇侃の説南側に移動して、君主を南面させるとしている。その点では前述の皇侃の説っここでも、室の北側に病臥していた者が、もし君主が見舞いに来た時には

などの説に従った注釈が一般的である。が、もし君主が見舞いに来た時は室の南側に移動するという、皇侃や孔穎達が上のように、室内の病臥位置について、病者は室の北側に病臥するのだ

子も同様である。朱子『論語集注』の注釈は、以下のとおりである。孔子が見舞いに来たため、伯牛が北側から南側に移動したという解釈は、朱さて、再び「伯牛有疾」章に戻り、この章についての朱子の説を見てみる。

入らず、而して牖自り其の手を執るは、蓋し之と永訣するなり。(注1)家は此の禮を以て孔子を尊ぶも、孔子は敢て當たらず、故に其の室にに遷る。君をして以て南面して己を視るを得しむるなり。時に伯牛の「病者は北牖の下に居る。」といふ。君之を視るときは、則ち南牖の下「疾有り」とは、先儒以て癩と爲す。「牖」は、南牖なり。『禮』に、

る。そこで、病人は南牖の下に移動し、君主に南面させるのである。にいたままでは見舞いに来た君主が北面することになってしまうからであ主がその臣下を見舞う時、病人は南牖の下に移動する。なぜなら、北牖の下主がその主張も基本的に通説に沿っている。病人は室の北牖の下にいる。君

げた。これも、孔子を南面させるために伯牛が北牖の下から南牖の下に移動本人はそれを辞退して室に入らず、ただ南牖から伯牛の手を執って別れを告そこで、伯牛の家ではこの礼に沿って孔子を遇しようとした。しかし孔子

て入室しなかったのだとしている。した、とする解釈である(注15)。しかし、孔子は君主を遇する形式を辞退し

正義』は以下のように結論づけている。『儀礼』既夕礼「死於適室」の注「疾時處北墉下」について、胡培翬『儀礼ここで「室」における「北墉」と「北牖」との問題を整理しておきたい。

た云ふ ば、 の説、 に據れば、兩つながら通ず可きに似たり」と。今案ずるに、『校勘記 又た注 敖氏、 士大夫以上皆同じ」と。 は堂の後に在り、南に牖有るも、 阮氏『校勘記』に云ふ 文』に從ひて「庸」に作る、李氏『集釋』も同じ。宋嚴州刻本、 正義日はく、 庸 墉 非なり。 に作りて「牆也、 『通解』、 「死而遷之當牖下」は、 『通典』、 「牀・第を設けて牖に當つ」と。 「當」に作る者是なるを知る。 注 下篇『記』に云ふ「寢ぬるに北墉の下に東首す」と。 楊氏、 「疾ある時は北墉の下に處る」とは、 『通解』、 「疏内に 敖氏、 本亦た墉に作る」と云ふ。張氏 注 16 俱に「墉」に作る。 倶に 嚴本、 「北牖」 北は惟だ牆のみにして、牖無きなり。 「當」に作る。毛本 徐本、『釋文』、『通典』、『集 鄭俱に此に本づきて説を爲せ 「南牖」を稱する者一に非ざる 『禮經釋例』に日はく、 毛本「牗」に誤る。 陸氏 『識語』 「南」に誤る。 『釋文』は 明徐本、 室 又

が、 下に當つ)」が正しいとする。 北側には 結論を言えば、 ここは 牖 「 牖<sup>\*</sup> はなく、 北は に作るべきで、 塘 墉 が正しく、 がある。 「死而遷之當墉下(死すれば之を遷して牖 室の南側には 「南北と は 「當牖 墉 が正しい。 牖 もある 室

移動するとする説が、 室の北側に病臥していたとしても、もし君主が見舞いに来た場合には南側に 以上に述べてきたように、 伯牛有疾章の解釈としても一般的である 帰患 の下か 「 塘~ の下かはともかく、 普段は

語正義』 さらに詳細な注釈を施している、 のこの箇所についての解釈は、 『論語正義』も、 その他の注釈と同様に移動説を採っている。 劉宝楠『論語正義』 以下のとおりである。 の解釈を見てみる。 二論

禮なり、 南牖の下に遷り、 る」と稱すれば、 若し然らば、 するは、君の室に入りて西立東面すると、正に相對することを得」と。 遷る、卽し君 疾を視るときも亦た然り。 案ずるに、 故に『論語』特に文もて之を記す。 古人平時の寢處は皆奧に在り、 病者北墉の下に遷り、而して『論語』 夫子は牖の外自り就きて之に問ふ」と。此れは是れ変 包咸謂へらく「牛惡疾有り、 毛氏奇齢謂へらく「東首西面 病ある時始めて北墉の下に 注 17 人を見るを欲せず、 「牖自り其の手を執 故に

奇齢は に遷ったはずであるが、 主が西側に立って東側を向くことで、顔を向かい合わせることができる」と 時には北側の墉の下に遷る。それは君主が見舞いに来た時も同様である。毛 のである。これは「変礼」であるからこそ、 の下に遷ったからこそ、 っている。そこで包咸は いっている。もしそうなのであれば、病人は 劉宝楠の解釈は以下のようである。室ではふだん「奥」に寝るが、病気の 「頭を東側にして〔体を起こして〕西側を向くと、室に入って来た君 孔子は牖の外側から彼を見舞ったのである」とした しかし『論語』 「伯牛は悪疾を患い、人と会いたがらず、南側の牖 は 「牖越しにその手を取った」とい 『論語』はことさらこれを記録 〔病気のために〕 北側の墉の下

したのである。

以上、 通説であると考えられる、 北側から南側への移動説を紹介した。

### Ξ 病臥位置は室の北側にあり、 伯牛が歩いて南側に移動したとする注釈

ようにある。 二論 『論語』 語』雍也篇伯牛章の該当箇所についての鄭玄の注は残ってい 郷党篇 「疾君視之」章の鄭注は残っており、 そこには以下の

疾あるとき、 室中の北墉の下に寢ぬ。 注 18

られない。 とである。 つまり、 ただし残っている鄭玄注では 鄭玄の説では 「病臥する時は室の北墉の下に病臥する」というこ 「南側に移動する」という注釈は見

この説について、 華喆 『礼是鄭学』では以下のように言っている

の時、 冉耕 のである。 で牀の上から降りて、 位置から南窓の下まで移動して、室内に手を差し伸べたのである。 としたのだが、 下に移動する必要がなかった。この時、 この室の戸は閉まっていて、孔子が堂に上った後も冉耕は牀を南壁の (伯牛) は北壁の下に病臥し、 冉耕は孔子が室内に手を差し伸べたのを見て、 唯一の方法は南窓の下だけだった。そこで孔子は戸の 南窓の下まで歩いて行って、 人に会おうとはしなかった。 孔子は冉耕と交流を果たそう 孔子の手を執った やむを得ず自分 だから

(注 19

に、伯牛は「歩いて」南側に移動したのだろうと推測している。か、と推測している。さらに、南窓から差し伸べられた孔子の手を執るためここでは、鄭玄は伯牛が北側に病臥したままであったと考えたのではない

側に病臥していた」とする説である。最後に、中井履軒『論語逢原』の説を紹介する。履軒は「もとより室の南

## 四 病臥位置はもとより室の南側にあったとする注釈

**言う。** 履軒は『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章注釈の第四項で、以下のように

とは、蓋し禮疏の杜撰なり、從ふ可からず。(注20)しく亦た此に在るべし、何ぞ必ずしも「北牖」ならんや。「北牖に居る」室中の牖下は、卽ち是れ奥なり。主人の常處と爲せば、病臥するとき宜る

その南壁には「牖」があるので、「牖」の外の堂とつながっている。とは室の西南隅で、主人の常に居る位置であり、伯牛もそこに病臥していた。この「牖下」は「北牖の下」ではなく、「奥」にあたるとしている。「奥」

は尊位である「奥」には座らないとする。(注21)。室内においては西南隅の「奥」が尊位なので、父と同室に居るときたらず」とあり、その鄭注は「室中の西南隅、之を奥と謂ふ」と言っているこの「奥」については、『礼記』曲礼上に「人の子爲る者、居るに奥に首

履軒の解釈は以下のようだと考えられる。すなわち、病者は牖下に病臥す

の南牖から伯牛の手を執ることができたのだ、という解釈である。牛は孔子の面会を拒んだが、病臥している傍らに牖があったため、孔子はそ伯牛が、孔子が見舞いに来たから南側に移動した、というわけではない。伯るが、それは室の北側ではなく西南隅である。もともと北側に病臥していた

首す」の箇所についての履軒の注釈に、詳しく述べられている。 この位置関係については、前引の『論語』郷党篇の「君之を視るとき、東

在り。 爲す。 り、 をして室中の尊位に就かしむるなり。 自然に東首せざるを得ず。其の北牖の下に在りて、常處を避くるは、 ば、 室中の位は東嚮を以て尊しと爲す。 則ち戸の出入を妨ぐ。西方に在らば、則ち東嚮して君に臨み不敬と 併論す可からず。 若し西首せば、 故に孔子牖自り其の手を執るを得たり。 則ち君の出入するに、 (注 22 病者若し南首北首して東方に在 伯牛の若きは則ち臥して常處に 病者の足 此の節と大いに逕庭 君に向く。 故に 君

履軒の説は以下のとおりである。

う。 Ł, も戸の出入りの妨げになる。病人が が いに来た君公に東向きに望むことになるので不敬となる。 (西南の位置) 室中では東向きが尊位であるが、病人が室の東側に臥すと北枕でも南枕で 北 君公が室を出入りするときに、病者の足が君公に向くことになってしま ゆえに自然と東枕にせざるを得ない。 牖と の下にいるのは、 に就いてもらうためである。 常にいる所 〔病臥せずに〕 西側にいたならば、 (奥) を避けて、 (君主が見舞いに来た時に) 病人 しかし伯牛の場合は、常にいる 君公に室中の尊位 もし西枕で臥す 見舞

ない。 る。 所 一面 伯牛の場合については、君主を尊位に就かせる礼と併論することはでき [南隅) に臥していたので、孔子は牖から手を執ることができたのであ

解 うよりも、 題として論じていると言える。履軒は 人間の姿や心の自然な事実、そういうものに基づくという意味での率直な読 この箇所の説明の仕方は、病臥位置とその方向について身近で現実的な問 (注23)を求めている。 実際的経験にもとづく実感」による「健全な常識や世の変わらぬ 「歴史主義、 文献実証主義であると言

たが、孔子がその心情に配慮して別れを告げたとして、以下のように述べる。 また履軒は、 雍也篇「伯牛有疾」章において、 伯牛は孔子の面会を辞退し

て宜しきに適ひたり、 と弟子との今生の訣別にして、又た忍びざること有るなり。是に於て か、牖自り其の手を執りて告別し、其の面を視ざるなり。 んと欲せば、則ち伯牛の心を苦傷す。見ずして還らんと欲せば、則ち師 孔子疾を問ふも、 伯牛は蓋し辭して見ざるなり。孔子強ひて室に入ら 人情を盡くす者なり。 注 24 此れ中を斟り

て解釈をしている。 履軒はここでも、孔子や伯牛の心情を読み取って身近で現実的な問題とし

最後に、履軒が伯牛の病臥位置について異説を唱えた根拠について述べる。 室内における尊位について、 『礼記』曲礼上には以下のようにある。

席 て上と爲す。 南郷北郷ならば、 西方を以て上と爲す。 東郷西郷ならば、 南方を以

(注 25

側が上位となる。ゆえに室内の上位は西南の位置になる。 上位となる。またもし東向きと西向きの席があったならば、 つまり、室内に南向きと北向きの席があったならば、どちらの席も西側が どちらの席も南

会」での席次に対して次のように雕題を書いている。 室中の尊位については、 履軒は『史記雕題』巻七「項羽本紀」 0) 「鴻門の

唯だ東嚮のみを尊と爲す。復た南嚮を以て尊と爲さず。 堂上の位、 堂下に對する者は、 南嚮を尊と爲す。 堂下に對せざる者は、 注 26

位となるとしている。 ることで尊位となる。 すなわち、一方が堂上、一方が堂下にいる場合は、 しかし、 両者がともに堂上にいる場合は、 堂上にいる者が南面 東向きが尊

られている。 そのことは、 『論語逢原』 雍也篇 「伯牛有疾」章の注釈でも、 同様に述

己を視るを以て君に待するの禮と爲す、 堂上之位、堂下に對する者は、 を尊と爲す。未だ室中に南面を尊ぶを聞かざる也。 南面を以て尊と爲す。室中の位は、 亦た異ならずや。 今室中に南面して (注 27 東鄕

### おわりに

したとする包咸、皇侃、 中井履軒の 「伯牛有疾 朱子などの従来の注を否定した解釈である。すなわ 章の解釈は、 礼の規定によって伯牛が南側に移動

あると言える。
についての従来の解釈に縛られない、室中の尊位との整合性を考えた解釈でから南側に移動したのではない、とする独特な説である。この説は、この章ち、伯牛はもともと室の西南に病臥していたのであり、孔子が見舞いに来た

注

- (1)杉山一也「中井履軒『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章の「牖」字について」(二
- (2) 関儀一郎『日本名家四書注釈全書』論語部四(東洋図書刊行会、大正十四年)

0

伯牛有疾、

伯牛、弟子冉耕字也、

魯人。

有疾、

時其有惡疾也

〇一九年三月、

日本論語教育学会に提出)

- 念出版であり、『論語逢原』の校正を担当したのは中井木菟麻呂である。五十号)、二○一○年)によれば、この本は明治四十四年の懐徳堂記念祭に伴う記(3)竹田健二「『論語逢原』の記念出版と中井木菟麻呂」(『中国研究集刊』玉号(総
- (4) 張惠言『儀禮圖』巻一「大夫士房室圖」から加工(国立国会図書館デジタルコレク
- (5) 何晏注·邢昺疏『論語注疏』 (藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』所収) 。

伯牛有疾

馬曰「伯牛、弟子冉耕。

子問之、自牖執其手、

包曰「牛有惡疾、不欲見人、故孔子從牖執其手也。

日「亡之。

孔曰「亡、喪也。疾甚、故持其手曰、喪之。.

命矣夫。斯人也而有斯疾也。斯人也而有斯疾也。」

包曰「再言之者、痛惜之甚。

【疏】「伯牛」至「疾也」。○正義曰、此章孔子痛惜弟子冉耕有德行而遇惡疾

疾甚、 此惡疾也。 耕。 者 也。  $\exists$ 伯牛惡疾、 」〇正義曰『史記』弟子傳曰 行善遇凶、 伯牛、 伯牛有惡疾」。〇正義曰、 故持其手曰「喪之」。 冉耕字也。 是孔子痛惜之也。 不欲見人、故孔子問之、從牖執其手也。 非人所召、故歸之於命、言天命矣夫。 有疾、 有惡疾也。 再言之者、 「命矣夫。 惡疾、 「冉耕、 疾之惡者也。 斯人也而有斯疾也。 痛惜之甚。 「子問之、 字伯牛」、 自牖執其手」者、 〇 注 Ę 斯、 鄭玄曰「魯人」。○注 『淮南子』云「伯牛癩」。 此也。 「馬日、 亡之」者、 斯人也而有斯疾也 此善人也、 伯牛、 亡 負 弟子冉 喪也。 從也。 而有 包包

(6) 注5参照

(7)皇侃『論語義疏』(中華書局、二〇一三年)一三四頁~一三五頁

馬融曰、「伯牛、弟子冉耕也。」

子問之、孔子往問伯牛之疾差不也。

**苞氏曰、「牛有惡疾、不欲見人、故孔子從牖執其手也。」** 師從戸入於床北、得面南也。孔子恐其惡疾不欲見人、故不入戸、但於窓上而執其手也。 自**牖執其手、牖**、南窓也。君子有疾、寐於北壁下東首。今師來、故遷出南窓下、亦東首、令

曰「亡之、亡、喪也。孔子執其手而曰喪之、言牛必死也。

孔安國曰、「亡、喪也。疾甚、故持其手曰喪也。

**命矣夫!**亦是不幸之流也。言如汝才德實不應死、而今喪之、豈非稟命之得矣夫。矣夫、助語

也

斯人也而有斯疾也!斯人也而有斯疾也!」斯、此也。言有此善人而嬰此之惡疾、疾與人

反、故歎之也。再言之者、痛歎之深也

**苞氏日、「再言之者、痛惜之甚也。** 

(8) 鄭玄注・孔穎達疏『禮記注疏』喪大記(藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』所

収。

寢東首於北牖下。

同 謂君來視之時也。 牖 音酉、 病者恒居其墉下、 舊音容、 下注 「牖下」放此。 或爲北墉下。 墉 0 「首」手又反、 音容 下注 南

鄉黨云、 (疏) 〇 「疾、 「注謂君」 君視之、 至 墉下」 東首加朝服」。 ○正義曰、 此云「東首」、故知是君來視之時也。 知 「謂君來視之時也」 者、 案 「論 語

説也。 北牖下」、是恒在北牖下也。 東方生長、 今謂病者雖恒在北牖下、 故東首鄉生氣。 云 若君不視之時、 「病者恒居北牖下」者、 若君來視之時 則不恒東首、 則暫時移嚮南墉下、東首、 『士喪』下篇云、 隨病者所宜。 此熊氏所 「東首于 令君得 以

9 この鄭玄注については阮元の校勘記がある。

南面而視之。

『集説』 「或爲北墉下」、 同。 按『釋文』出 閩監毛本同。 「爲墉」、是亦無 岳本同。 嘉靖本同。 迡 惠棟挍宋本、 字 無 丠 字。 衞氏

- 10 注8参照。 なお校勘記に従い 「移嚮南墉下」を 「移嚮南墉下」 に改めた。
- 11 何晏注·邢昺疏『論語注疏』鄕黨篇(藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』所

#### 疾、 君視之、 東首、 加朝服、 拖紳。

収

包曰、 衣朝服見君 「夫子疾、 處南牖之下、 東首、 加其朝服、 拖紳。」 「紳」、大帶。 不敢不

服於身、 令君得南面而視之。 【疏】「疾君視之東首加朝服拖紳」○正義曰、 加也。 又加大帶於上、 紳 大帶也。 以病臥不能衣朝服及大帶、 病者常居北牖下、 爲君來視、 又不敢不衣朝服見君。 此明孔子有疾、 則暫時遷鄉南牖下、 君來視之時也。 故但加朝 東首、

17

劉寶楠

雍也篇

(『皇清経經續編』

巻一〇五七)。

「東首西面、

- 12 注 11 参照。
- 13 注 11 参照
- 14 伯牛有疾、子問之、自牖執其手、曰「亡之、命矣夫。斯人也而有斯疾也。斯人也而 朱熹『論語集注』 雍也篇 (『四書章句集注』中華書局、 九八三年) 八七頁。

### 有斯疾也。

首

惜之。 之、亦可見矣。○侯氏曰、 尊孔子、孔子不敢當、 夫、音扶。 言此人不應有此疾、 病者居北牖下。 ○伯牛、 君視之、則遷於南牖下、 孔子弟子、姓冉、 而今乃有之、是乃天之所命也。 故不入其室、 「伯牛以德行稱、 而自牖執其手、 名耕。 亞於顏、 使君得以南面視己。 有疾、 蓋與之永訣也。 先儒以爲癩也。 然則非其不能謹疾而有以致 閔。 故其將死也、 時伯牛家以此禮 俞 牖 孔子尤痛 謂天命。 南 牖也。

- 15 ただし、朱子『論語集注』では「北牖(まど)」の下から移動するとしているが 後の諸注釈で 「北墉(かべ)」の誤りだと指摘されている。
- <u>16</u> 胡培翬 『儀禮正義』士喪禮(『皇清経經續編』巻七二三)

牖也。 徐本、 正義日、 爲説、 勘記』之説非也。 誤 張氏『識語』 『通典』、『通解』俱作「墉」。毛本誤「牖」。又注「死而遷之當牖下」、 南。 知 作 士大夫以上皆同. 『釋文』、 注 阮氏『校勘記』云、 墉 「疾時處北墉下」、陸氏『釋文』作 從『釋文』作 下篇記云、 『通典』、 當 者是。 「庸」、李氏 『集釋』、 「寢東首于北墉下」、 「據疏内稱北牖南牖者非一、似可兩通」。今案、 『禮經釋例』 『通解』、楊氏、 『集釋』同。 Ę 「庸」云 「室在堂後、 又云「設牀第當牖」。 宋嚴州刻本、 「牆也、 敖氏俱作 南有牖、 本亦作 明徐本、 當」、 北惟牆、 墉」」 鄭俱本此 敖氏、 毛本 『校 無

與君之入室西立東面正得相對」。 案 古人平時寢處皆在奧、 『論語正義』 病時始遷北墉下、 若然、 病者遷北墉下。 即君視疾亦然。毛氏奇齡謂 而論語稱「自牖執其手」者

包咸謂「牛有惡疾、

不欲見人」、

故遷於南牖下、

夫子自牖外就而問之。

故論語特文記之。

18 疾時寢室中北墉下也 王素編著『唐寫本論語鄭氏注及其研究』 (文物出版社、 一九九一年)一二一頁。

# | 冉耕朳苪比庸之下,不愿见人,汝比至立关刃,孔子登堂之言,冉弉自然及气19) 華喆『礼是鄭学』(生活・読書・新知三聯書店、二〇一八年)六八頁。

从户的位置行至南牖下,伸手进入室内。此时冉耕见孔子伸手入内,只得自己从床上牖下的必要。这时孔子与冉耕想要达成交流,唯一的途径就是在南牖之下,于是孔子冉耕臥病北墉之下,不愿见人,故此室户关闭,孔子登堂之后,冉耕自然没有移床南

(20)中井履軒『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章。

下來

走到南牖之下,与孔子执手

(21)鄭玄注・孔穎達疏『禮記注疏』曲禮上(藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』

## 爲人子者、居不主奧、坐不中席、行不中道、立不門。

所収)。

室中西南隅謂之奧。

(22)中井履軒『論語逢原』鄕 黨篇「君賜食」章。

節大有逕庭、不可併論 下 臨君爲不敬。 室中之位、 避常處、 以東嚮爲尊。 若西首、 使君就室中尊位也。 則君之出入、病者之足向君。 病者若南首北首在東方、 若伯牛、 則臥在常處、 則妨于戸之出入。在西方、 故自然不得弗東首也。 故孔子得自牖執其手。 其在北牖 則東嚮 與此

(3)加地伸行『加地伸行著作集Ⅱ 日本思想史研究』(研文出版、二○一五年)三八

一~三八三頁。

(24)中井履軒『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章。

而適乎宜、盡於人情者也。師弟子今生之訣別、又有不忍也。於是乎、自牖執其手而告別、不視其面也。此斟中師弟子今生之訣別、又有不忍也。於是乎、自牖執其手而告別、不視其面也。此斟中孔子問疾、伯牛蓋辭而弗見也。孔子欲強入于室、則苦傷伯牛之心、欲不見而還、則

(25)鄭玄注・孔穎達疏『禮記注疏』曲禮上(藝文印書館影印『十三經注疏附校勘記』

所収)。

## **席南鄕北鄕**、以西方爲上、東鄕西鄕、以南方爲上。

(26)中井履軒『史記雕題』巻七「項羽本紀」十三葉表。

堂上之位、對堂下者、南嚮爲尊。不對堂下者、唯東嚮爲尊。不復以南嚮爲尊。

(27)中井履軒『論語逢原』雍也篇「伯牛有疾」章。

中以南面視己、爲待君之禮。不亦異乎。堂上之位、對堂下者、以南面爲尊。室中之位、東鄕爲尊。未聞室中尊南面也。今室

杉山一也(すぎやま・かずや)

ときの辞典』(平凡社、二〇一三年一〇月)など。『教養としての中国古典』(ミネルヴァ書房、二〇一八年四月)、『白川静を読む一九六一年生まれ。岐阜協立大学経済学部准教授。専門は中国思想史。共著に